

異彩を放った

グリーククラブ

昭和二三年度の新学期に着任した生内義夫教師は、粗野な風潮に走りがちな男子校に音楽を通じてうるおいをもたらした。授業で彼のピアノとバリトンに接し、芸術の真価に開眼した生徒は多い。生内教師はさらに音楽部の部長として若い情熱を燃やし、みごとに男性コーラス・グループを育て上げた。音楽部員をメンバーとする、本校グリーククラブの誕生である。

当時、運動部のめざましい活躍にくらべ、文化部の活動はややもすれば低調であったが、そのなかにあつて音楽部は猛烈な練習に励み、急速に実力を伸ばした。創立記念日や運動会のにきに発表される合唱を聞いて、誰もが音楽部の成長ぶりに驚いた。指導者の情熱が部員の情熱を引き出し、両者が一体となつていい結果を生んでいった。

昭和二四年には、グリーククラブとしてのみならず、岩手女子高校音楽部と合同で「岩手フルハーモニックスサイティ」を結成して、混声合唱にも力量を発揮する。そして県主催の第三回岩手芸術祭に参加し、本校国語科教師・水原

一作詞、生内義夫作曲になる新作カンカータ「北上川」を発表して、聴衆に深い感銘を与えた。ここに、岩高音楽部に対する高い評価が確立されたのであつた。

生内教師の本校在任期間は昭和二五年春までの丸二年間と短かつたにもかかわらず、彼の残した遺産は大きかつた。

生内は退職後も折を見て来盛し、部員の指導に当たつた。たとえば「岩手高校創立二五周年記念祝典カンカータ」などもその結晶で、作詞・水原一、作曲・生内義夫の名コンビの生んだ作品が、グリーククラブの情熱あふれる合唱によって紹介され、聴く者の胸に感動を呼び起こしたのである。